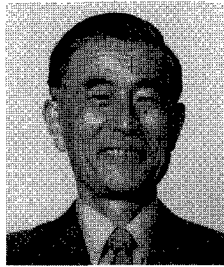


浮田典良先生を悼む

常任委員、評議員として久しく本学会に貢献された浮田典良先生は、2005年1月12日、膵臓癌のために不帰の客となられた。享年76歳であった。人文地理学会（1980～84）と日本地理学会（1992～94）のふたつの学会の会長を歴任され、戦後半世紀の地理学界を常にリードされ続けた名実ともに日本を代表する地理学者であられた。



関西学院大学文学部にて
(1992年)

先生は、1928年9月12日東京市渋谷区に生まれて横浜で幼少期を過ごし、銀行家の御父君の転勤により二度の上海生活を含む数度の転居を体験された。1945年兵庫県立第一神戸中学校から広島高等師範学校文科第三部に進学して1949年地理科を卒業、さらに同年京都大学文学部史学科に入学、地理学を専攻して1952年に卒業された。大学院進学とともに高等学校（および中学校）教諭として一年間勤務の後、1953年京都大学分校（のち教養部）助手、1958年には大阪府立大学教養部専任講師に就任、同助教授を経て1968年京都大学に転じ教養部助教授、1972年に同教授となられた。

この間、1963～65年にアレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンスター大学に留学し、その研究成果『北西ドイツ農村の歴史地理学的研究』（1970）により1971年京都大学から文学博士の学位を授与された。20年におよぶ京都大学在職中には評議員（1980～82）と教養部長（1984～85）をつとめ、1988年退官して名誉教授の称号を受けられた。同年関西学院大学文学部教授に就任、1996年神戸学院大学人文学部に移り、2000年の定年退職まで通算47年間を大学の仕事に捧げられた。その後も砺波散村地域研究所長や三田市史編さん専門委員会代表など、指導的なお立場で研究を続けておられた。

関西学院大学の大学院生であった1973年、単位互換の交流研究生として、関西大学に出講されていた先生の授業を一年間受ける機会に恵ま

れたとはいえ、その後関学大に着任されるまで、長くお近づきの機会をもちえなかった私には、浮田先生の学問遍歴を語ることはまことに覚束ない。それでも先生の仕事の数々が人文地理学の主要な成果をなし、しかもそれぞれが信頼度の高い堅牢で息の長い研究業績であることを承知している。それは茶業や綿作の歴史地理学的研究に始まり、農業、集落、社会、土地利用、地域スケール、地誌、やがては国境、地名、人口、観光、地理教育などのきわめて幅広い分野にわたる。編者、監修者としての活躍はいうまでもなく、さらに先生が国際的に果たされた貢献も大きい。

研究者としてだけではなく、気さくにみずから範を示されるような、爽やかな教育者としてのお姿にも感銘を受けるばかりであった。先生ほど教え子に慕われた教員を他に知らない。先生もまた学生をこよなく愛された。その学生たちには、しばしば愚直であれと説かれていた。身の丈にあわせた研究をせよ、という重苦しい訓示ではもちろんない。僭越な物言いになるが、先生の真意は、地理学という学問は愚直に取り組んでこそいっそう輝きを増す、というものであったと理解している。その最大の実践者は先生ご自身であった。しかし愚直を通じて、先生は誰も及ぶことのない非凡な高みに軽やかに到達しておられたように思う。

困難な部位に病巣が発見されたのは2004年1月、それからちょうど一年間のご闘病であった。残された時間を自覚されつつ、雑誌連載など予定の仕事を着実丁寧にこなし、入院された年末年始の病床では『地図表現半世紀 私の描いた主題図126』の初校に朱を入れ、二校以降をご家族に託されて旅立たれたという。研究者としての先生の来し方の記録であるこの遺作には、知の技法が伝達可能な継承遺産であるとの先生のメッセージが強く込められているように思われてならない。あわせて300編を超える仕事とともに、病魔に屈せず果敢に闘い抜かれた先生が最後に遺して下さった書物から、今後いつまでも導きを受けたいと切に思う。いまは心からご冥福をお祈り申し上げる。

(八木康幸)